

# 【研究ノート】盆栽の陳列方法

2023年12月号では、盆栽雑誌『盆栽雅報』（盆栽同好会発行）の記事から、盆栽の陳列方法について、盆栽同好会が盆栽を普及するために「軽便」な陳列を目指し、新たな陳列方法を試みたことを紹介しました。明治時代から大正時代にかけては、盆栽同好会を始めとした各同好会で、盆栽の陳列方法を模索していた様子があがります。今号では、同時代に刊行された



『華』4年3集 表紙

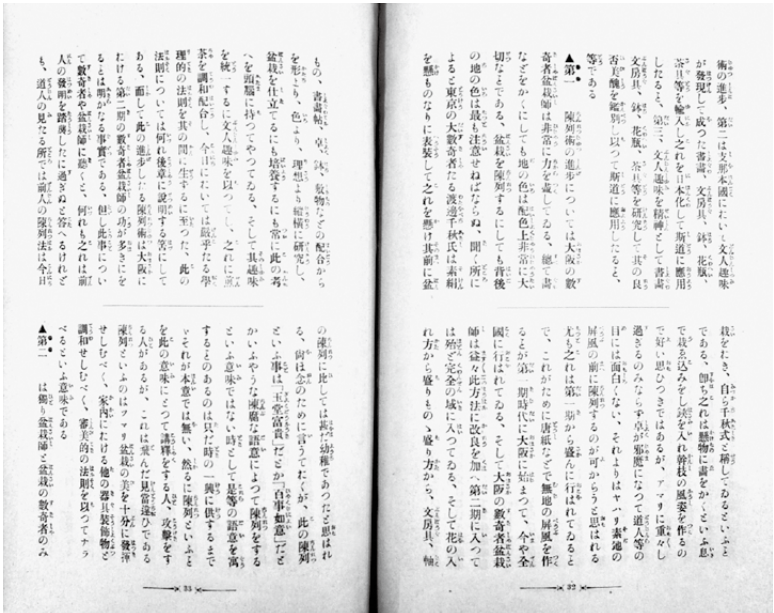
盆栽雑誌から、盆栽陳列の様子をより詳しく紹介します。

『盆栽雅報』を見ると、盆栽同好会は新たな陳列方法を模索し、その方法について試行錯誤を重ねていたことがわかります。例えば、同誌3号（明治39年7月）の飯田聰泉（翼）による「盆栽昔譚」によると、盆栽同好会の陳列会では、座敷に「盆栽水石等数点を、賑かに配置」しましたが、この方法は自ずと陳列品の数が多くなるため、煎茶家の非難を受けたといえます。ほかにも、盆栽同好会の第3回盆栽陳列会は、「雑多にして品種卑しく」見えたため、飯田聰泉は述べています。展示品が「配置少きは、物足らぬ心地」がする一方で、「多きに過るときは、列品卑しく」見えるというジレンマがあり、その間をとって「疎ならず密ならず、盆器の形色、台の高下方円等を考量して」盆栽を配置し、ようやく観覧者の

意に添うようになったということですね。

また、『盆栽雅報』87号（大正2年7月）の去来園主人による「陳列盆栽の生命」では、近年は2つ以上の盆栽を陳列することが多いが、相互の関係性が考慮されておらず、「夜の陳列」と変わらないと揶揄しています。これに対して、去来園主人は、「二盆以上陳列して稍（やや）拡大されたる興趣を味はくんとするならば、其盆樹の相互に於ける所謂「わゆる」関係美なるもの」が必要であり、「樹性の関係に留意して這（こ）を原則とし、重きを之におきたる上、各樹の自然的分布状況又は其生育状態などを調べ、依つて以て此自然的順応に「基くべきと主張しました。盆栽を主とした陳列を模索する中で、盆器や台の形状等に配慮しながら間隔を保って陳列する方法や、

盆栽同士の関係性を考慮した陳列が見られるようになります。このほか、新たな陳列方法の試みとして、『盆栽雅報』29号（明治41年9月）では、子爵の渡邊楓閣（千秋）が考案した「千秋式」という方法が紹介され



『華』4年3集 「盆栽道 第12回」

ています。「千秋式」は、「白紙（絹）の幅（掛軸）を作らしめ、盆栽を其前に陳排して（中略）幅中の画となして賞観」する方法で、盆栽と掛軸で一つの絵画に見立てるといふ試みです。陳列に関する興味深い試みの一つではありますが、大阪園芸会が発行する『華』4年3集（明治43年3月）「講演 盆栽道第十二回（五）盆栽の歴史（下）の六」では、「千秋式」のことを「好（よ）い思ひつきではあるが、アマリに重々し過ぎるのみならず卓が邪魔」で面白くないと批評する声もありました。一方、大阪では、屏風の前に盆栽や諸道具を陳列する方法が広まっていた（前出『華』4年3集）。この方法は、文人趣味や煎茶文化に学んだものでしたが、「盆栽の美を十分に発揮せしむべく、家内における他の器具装飾物と調和せしむべく、審美的の法則を以つてナラべる」ことが本意であると述べられています。

中には、屏風に取り外し可能な聯掛（れんがけ）（書画を掛けるもの）を付け、盆栽に合わせた詩や俳句をはめて飾る試みもされてきました（『華』3年4集、明治42年4月）。この方法は、「書画などと盆栽とが毫（こ）も調和しない没交渉」の陳列方法への不満と、盆栽に合う掛軸をいくつも用意することが困難である現実を受けて考案されました。以上のように、『盆栽雅報』と『華』を見てみると、明治40年頃から盆栽陳列についての記述が多くなってきました。個人の趣味であった盆栽を陳列するという意識が育まれていく中で、様々な場所で、様々な飾り方が試みられた一時代であったと言えるでしょう。そして、この陳列への意識の高まりが、大正時代を経て、昭和9年の国風盆栽展の開催へとつながっていくことになるのです。今回は、盆栽雑誌の記述から、盆栽飾りの方法について紹介しましたが、今後は実際の陳列の様子を記録した挿絵や写真から分析し、飾り方の変化について迫っていきたいと思います。

（当館主事 立石見雪）